

慶應言語学コロキウム

ボックス理論における統辞論 および音韻論・意味論とのインターフェイス

講師：中島崇法(弘前大学)、齋藤章吾(弘前大学)
堤博一(都留文科大学)、廣川貴朗(福井大学)

司会：中島崇法(弘前大学)

コメンテーター：内堀朝子(東京大学)、北原久嗣(慶應義塾大学)

日時：2024年6月22日(土)～23日(日) 13:30-18:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

※対面開催のみ(オンライン配信の予定はありません)

※今回のセミナーは生成文法研究の専門的知識が前提となります

使用言語：日本語

参加申込：研究所ホームページもしくは右のQRコードよりお申込み下さい

* 準備の都合により、事前申込をお願いいたします。

* 事前にお申込みいただかない方の当日参加も可能ですが、会場にて参加者カードへの記入が必要となります。



Chomsky (in press) “The Miracle Creed and SMT” は、強い極小主義のテーゼ (SMT) および言語を思考生成システムとみなす言語観を指針としながら、ボックス理論と呼ばれる新たな理論を提案している。この理論では統辞操作の適用条件について上記の観点から改定が試みられており、とりわけ転置要素の統辞派生およびその意味解釈・外在化プロセスについて従来の理論とは大きく異なる提案がなされている。そのため本コロキウムでは、ボックス理論が統辞論研究および音韻・意味とのインターフェイス研究にどのような新しい視点もたらしうるかを、4名の講師の発表を通じて検討する。

コロキウム1日目では、統辞論におけるボックス理論の帰結を論じる。中島講師は、ECP効果(抽出における主語と目的語の非対称性・項と付加詞との非対称性)をボックス理論に依拠し分析する。廣川講師は、INFL指定部の主語の諸特性を検討したうえで、C主要部からのアクセスの観点から捉え直しをおこなう。

コロキウム2日目には、ボックス理論における統辞論と音韻論・意味論とのインターフェイスについて考察する。齋藤講師は、構造上の位置と外在化位置とのずれを捉える新しい線形化プロセスを提案する。堤講師は、転置要素の変項束縛解釈プロセスについて新たな提案をおこない、統辞構造と意味解釈との対応関係を明確化する。

第1日目：ボックス理論と統辞論

- ・発表1「ボックス理論に基づくECP効果の分析」(中島崇法) 13:30-15:00
- ・発表2「ボックス理論における主語位置へのアクセスについて」(廣川貴朗) 15:15-16:45
- ・ディスカッション 17:00-18:00

第2日目：ボックス理論と音韻論・意味論とのインターフェイス

- ・発表1「ボックス理論において求められる線形化プロセスについて」(齋藤章吾) 13:30-15:00
- ・発表2「ボックス理論における転置の解釈」(堤博一) 15:15-16:45
- ・ディスカッション 17:00-18:00

[お問い合わせ先]

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595(事務室直通) メール：genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>